

第12回

日本医師会

赤い賞

かかりつけ医たちの奮闘

受賞者紹介



日本医師会

赤ひげ大賞

目次

- 3 第12回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要
- 4 祝辞 内閣総理大臣 岸田 文雄 (ビデオメッセージ)
- 5 主催者挨拶 日本医師会 会長 松本 吉郎
- 6 主催者挨拶 産経新聞社 代表取締役社長 近藤 哲司
- 7 協賛社挨拶 太陽生命保険 代表取締役社長 副島 直樹
- 8 祝辞 厚生労働大臣 武見 敬三 (代読 三浦靖厚生労働大臣政務官)
- 9 表彰式・レセプションの様子
- 10 選考委員コメント

受賞者紹介 (順列は北から)

- 11 清水 三郎 (千葉県 清水三郎医院 院長)
- 16 安福 嘉則 (岐阜県 関市国民健康保険洞戸診療所 医師)
- 21 亀井 克典 (愛知県 かわな病院在宅ケアセンター センター長)
- 26 武田 以知郎 (奈良県 明日香村国民健康保険診療所 管理者)
- 31 北野 明子 (福岡県 きたの小児科医院 院長)

36 赤ひげ功労賞 受賞者

38 選考経過報告 日本医師会 常任理事 黒瀬 巖

39 第13回「日本医師会 赤ひげ大賞」推薦概要

(肩書きは2024年3月時点のもの)



第12回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要

「赤ひげ大賞」は、公益社団法人日本医師会と産経新聞社が主催し、「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジの後援の下、平成24年に創設(第6回より太陽生命保険が特別協賛)されました。各都道府県医師会から候補者を推薦していただき、選考委員の厳正な協議を経て、第12回「日本医師会 赤ひげ大賞」の大賞5名と、功労賞14名の受賞が決定しました。

- 主催** 日本医師会、産経新聞社
- 後援** 厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
- 協力** 都道府県医師会
- 特別協賛** 太陽生命保険
- 対象者** 病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会及び都道府県医師会の会員で現役の医師(ただし、現職の日本医師会・都道府県医師会役員は除く)。
- 推薦方法** 本賞受賞にふさわしいと思われる方1名を各都道府県医師会会長が推薦
- 選考委員** 羽毛田信吾(恩賜財団母子愛育会会長)
向井 千秋(東京理科大学特任副学長)
檀 ふみ(俳優)
ロバート キャンベル(早稲田大学特命教授)
浅沼 一成(厚生労働省医政局長)
医 学 生(岐阜大学・佐賀大学/令和5年度)
釜 范 敏(日本医師会常任理事)
黒瀬 巖(日本医師会常任理事)
近藤 豊和(産経新聞社上席執行役員)
河合 雅司(産経新聞客員論説委員)

(肩書きは2024年3月時点のもの)

内閣総理大臣 岸田 文雄 (ビデオメッセージ)



本日、栄えある日本医師会赤ひげ大賞及び赤ひげ功労賞を受賞された皆様、誠におめでとうございます。支えてこられた御家族の皆様にも心からお祝いを申し上げます。

また、令和6年能登半島地震において、お亡くなりになられた方々に御冥福をお祈りするとともに、被災された全ての方々にお見舞いを申し上げます。被災地では、今なお多くの方が、厳しい避難生活を余儀なくされています。こうした状況の中で、被災地で御活動されている医療従事者の皆様には、地域医療の確保のため御尽力いただいておりますことに、心から敬意と感謝を申し上げます。

日本医師会赤ひげ大賞は、地域の医療現場で長年にわたり活躍されてきた医師にスポットを当てて、地域医療の大切さを広める事業として創設され、今年度で第12回を迎えたということであり

ます。今回、受賞された皆様は、各々の地域において、在宅医療や救急医療を始め、地域の生活と密着して、地域医療を支えていただいていると伺っております。長年にわたり地域住民の健康を支え続けている皆様の崇高な使命感と行動力は、正に現代の赤ひげ先生であり、皆様の受賞は、全国津々浦々で地域医療に携わっていらっしゃる医師の方々の励みとなるものです。

我が国は、人口減少・高齢化の進展が見込まれる中で、質の高い医療を効率的に提供できる医療提供体制の確保が課題です。この課題に対応するため、地域の事情に応じ、各医療機関が機能や専門性に応じて連携して対応することが重要です。

こうした考えの下、地域ごとに必要な医療を必要ときに受けられる体制を確保していくため、昨年5月に医療法を改正したところであり、国民が、かかりつけ医機能を有する医療機関を適切に選択できるよう、具体的な制度設計の検討を深めてまいります。

こうした取組を進めることで、今回受賞された皆様の取組が様々な地域で広がっていくよう後押ししてまいります。

結びに、日本医師会赤ひげ大賞がますます発展されること、また、皆様方のますますの御活躍をお祈り申し上げて、私の挨拶といたします。

日本医師会 会長 松本 吉郎



本日ここに、多くの皆様のご出席の下、第12回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式を遂行させて頂きますことを心より感謝申し上げます。

本賞は、各地域に根付き、その地域の住民に寄り添いながら、医療現場で地道にご尽力されておられる先生方の活動にスポットを当て、その功労を顕彰したいとの思いで平成24年に創設したのですが、このたびで12回目を迎えることができました。

今年は元日の令和6年能登半島地震発生により、大変心痛む幕開けとなりました。本会では、発災直後から都道府県医師会の協力の下、「JMAT」という日本医師会災害医療チームを派遣するとともに、医療機関の状況把握と支援にも努めてきておりますが、今後の復興には何よりも、地域に愛情をもって尽くす医師の存在が欠かせません。

そうした意味においても、今回の受賞者である5名の「赤ひげ大賞」の先生方、そして14名の「赤ひげ功労賞」の先生方はいずれも、各地域において献身的に医療活動に従事され、患者さんの信頼も厚く、地域にとって欠かすことのできない方々ばかりと言えます。また、その功績を拝見しますと、日々の診療はもちろん、救急医療や在宅医療の体制整備、地域医療を目指す後進の育成、子育て支援など、地域の課題に、周囲の方々の協力を得ながら積極的に取り組んでおられ、一人の医師として改めて心から敬意を表する次第です。

国民の方々にはぜひ本賞を通じて、このような素晴らしい医師が全国各地にたくさんいることを知って頂くばかりでなく、信頼できるかかりつけ医を見つけたいと思って頂ければ幸いですし、日本医師会としても引き続き、地道に地域医療を守っておられる一人一人の医師の活動を支えて参りたいと思います。

結びとなりますが、改めまして、ご協力頂きました都道府県医師会の皆様に感謝いたしますとともに、共催の産経新聞社、ご後援の厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ、特別協賛頂きました太陽生命保険株式会社を始め、本事業の実施にご尽力頂きました方々に、心より御礼申し上げ、私からのあいさつとさせていただきます。

受賞者の先生方、本日は誠にありがとうございました。

産経新聞社 代表取締役社長 近藤 哲司



「赤ひげ大賞」ならびに「赤ひげ功労賞」を受賞された皆様、誠におめでとうございます。

今年は5名の先生方を「赤ひげ大賞」に、14名の先生方を「赤ひげ功労賞」に決定いたしました。いずれの受賞者も地域に深く根ざし、住民の健康な生活を支えてこられた方ばかりで、まさに「現代の赤ひげ先生」の名前にふさわしい活躍をされています。

平成24年に創設された「赤ひげ大賞」は、今年で12回目を迎えました。地域住民のかかりつけ医として日々奮闘されている皆様に、心から敬意を表します。また、その活動を支えてこられたご家族の皆様にもお祝いを申し上げます。

昨年を振り返りますと、新型コロナウイルスの感染法上の位置付けが「5類」に変更され、様々なイベントが再開するなど、社会・経済活動の活性化を実感できる年となりました。コロナとの戦いは4年以上に及びますが、日本における人口当たり死亡者数や致死率は、国際的にみても低い水準にとどまっています。これは、ここにいる皆様をはじめとする全国の医療関係者によるご尽力の賜物です。

ポストコロナの新時代に視線を移した矢先の今年元旦、能登半島地震が発生しました。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。被災地では医療設備等が十分整わない中、地元の医師らによる献身的な活動が続いていると聞きます。不測の事態にあっても最前線で対応に当たる医療関係者の方々に、ただただ頭が下がる思いです。

日本では超高齢社会が進み、人生100年時代が到来しつつあります。医療に求められる役割は、病を治すだけでなく、健康に暮らしていける時間をいかに長くできるかにまで広がっています。その成否を握るのは、地域医療を担う皆様の存在です。より一層のご活躍をお願い申し上げます。

私ども産経新聞社も報道機関として、紙面での提言やイベントの開催などを通じ、日本の医療の充実、さらには国民の長寿と健康的な暮らしの一助となるべく、これまで以上に力を尽くしていく所存です。

結びになりますが、「赤ひげ大賞」開催にあたり、ご協力をいただきました厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ、選考委員をはじめとする関係各位、特別協賛をいただいた太陽生命保険株式会社に、厚く御礼を申し上げます。受賞者の皆様、誠におめでとうございます。

太陽生命保険 代表取締役社長 副島 直樹



「赤ひげ大賞」を受賞された5名の皆様、ならびに「赤ひげ功労賞」を受賞された皆様、誠におめでとうございます。2023年5月に新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが5類感染症に移行され、感染対策は個人や企業の自主的な判断を基本とする、新たな日常が始まりました。新型コロナウイルスの蔓延から現在まで、医療現場の最前線でご尽力されていらっしゃるすべての皆様に、心から敬意を表すとともに、深く感謝申し上げます。

今回受賞された5名の先生方は、地域の人々が安心して毎日暮らしていけるよう、長年にわたりひたむきに尽力されてきた先生ばかりです。地域で生活する人々に寄り添い、支え、命と向き合ってきた先生方の姿勢に感銘を受けるとともに深く敬意を表します。

当社では、社会課題の解決という保険会社の責務を全うすべく、確実に保険金をお支払いするという従来の役割だけでなく、疾病の予防と保障が一体となった商品のご提供を通じて、お客様の健康増進をサポートするという新たな役割にも取り組んでいます。

人生100歳時代においては、「元気に長生き」するということが重要であり、そのためには疾病の「治療」だけでなく、病気の兆候を早期発見するなどの「予防」への取り組みが欠かせません。地域住民に寄り添い、適切な治療だけでなく予防にまで携わられる先生方のように、当社もお客様に寄り添い、疾病を予防し、お客様が元気で生き生きと暮らしていけるようサポートするために、早期発見に役立つサービスをご案内しています。今後とも、お客様の安心で豊かな暮らしを支える保険会社となるために、更なる取り組みを進めていきます。

今後も地域医療の更なる発展につながることを願い、長年地域住民を支えてきた先生方を顕彰する「日本医師会 赤ひげ大賞」をより多くの方々に知っていただけるよう当社も微力ながら支援したいと考えております。

最後になりますが、当社はこれからも地域で献身的な医療に取り組む赤ひげ先生と同じように、多くの方々の「元気・長生き」をサポートするため、商品やサービスの充実を図ってまいります。また、全国各地の赤ひげ先生の益々のご活躍を心より祈念申し上げます。

厚生労働大臣 武見 敬三 (代読 三浦靖厚生労働大臣政務官)



本日、栄えある第12回「日本医師会 赤ひげ大賞」において「赤ひげ大賞」を受賞された5名の方々及び「赤ひげ功労賞」を受賞された14名の方々に対し、心からお祝いを申し上げます。

また、令和6年能登半島地震において、お亡くなりになられた方々に心からお悔やみを申し上げますとともに、被災された全ての方々にお見舞いを申し上げます。

本日お集まりの医療関係者の皆様方におかれましては、今回の地震への対応として、医療従事者の派遣などにご尽力いただいておりますことに、心から敬意と感謝を申し上げます。

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、地域に根差した「かかりつけ医」として、生命の誕生から看取りまで、病を診るだけでなく、予防や健康増進も含めてご活躍されている医師にスポットを当てた、地域医療の大切さを広めるための事業です。

受賞者の皆様におかれましては、住民が安心して生活を送れるよう、過疎地域などの現場で、地域に寄り添いながら、診療と健康確保に日夜取り組んでこられたと伺っております。長年にわたり、住民を支えてこられた皆様は、地域医療を豊かに育ててこられたかけがえのない方々であると思います。

地域医療には、病気の治療だけでなく、その地域の人々の様々な思いを受け止め、地域での生活を支える、「治し、支える」医療が求められています。

そして、そのような、住み慣れた地域での生活を支えているのは、「かかりつけ医」の皆様です。

昨年5月に成立しました改正医療法においては、「かかりつけ医機能」を、身近な地域において日常的な診療や疾病予防を行う機能と位置づけ、地域の人々が自身のニーズに応じて医療機関を選択できるよう、情報提供を強化することとしました。

厚生労働省としては、このかかりつけ医機能が十分に発揮されるよう、今回受賞された皆様や関係団体の皆様と協力しつつ、全力を尽くしてまいります。

最後になりますが、本日ご出席の皆様方のご健勝とご多幸を祈念いたしまして、私の挨拶といたします。

第12回 日本医師会

赤ひげ大賞

主催
日本医師会、産経新聞社
後援
厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
協力
都道府県医師会
特別協賛
太陽生命



赤ひげ大賞受賞者5人の記念写真



岸田総理からはビデオメッセージにて祝辞が述べられた



多くの関係者が出席し盛会の表彰式に



レセプションでは歓談の輪が広がった



レセプションで受賞者と御懇談される秋篠宮皇嗣同妃両殿下



羽毛田 信吾 委員 恩賜財団母子愛育会会長

第1回から選考委員をしているので、特別なことをした人に目がいきがちだが、原点に立ち返り選考に臨んだ。やはり、「地域のため地道にやっていく」のが基本だとの視点が大事だ。



向井 千秋 委員 東京理科大学特任副学長

地域住民への長年の貢献を軸に、“現代の赤ひげ”の観点から、健康教育、予防医学、医療システムの構築、人生100年時代の生活の質を含めた健康の追求を行っている人も評価した。



檀 ふみ 委員 俳優

少子高齢化の中、新たな方法でのネットワーク作りや電子カルテの活用など、今後の地域医療の維持のために尽力する先生を評価した。若い先生の活躍も目立ち、日本の医療も捨てたものではないと思った。



ロバート キャンベル 委員 早稲田大学特命教授

それぞれの地域特性の中で、患者目線で医療を行っている人を評価した。今回、かかりつけ医の領域を超えた活躍をしている先生もおり、そういった多様性も重視して選んだ。



浅沼 一成 委員 厚生労働省医政局長

長年地域医療に携わり、地域における様々な課題に取り組みされた先生方に敬意と謝意を表す。「赤ひげ先生」は求められる理想の医師像であり、顕彰することは大変意義深い。



医学生 岐阜大学・佐賀大学/令和5年度

- 自分から行動を起こす大切さや、病院を飛び越え、「地域の生活」という広い視点で改善点を見つけていく必要があることを学んだ。地域に必要な医療の提供に至るまで、多くの努力があると思った。(岐阜大学)
- どの先生も社会に積極的に関わり、医療に貢献しているのが印象的だった。選考に参加し、医師に求められることについて深く学ぶことができ、自分の目指す医師像がより明確になった。(佐賀大学)

救急医療体制立て直しに尽力

清水三郎医院 院長

清水 三郎

〈千葉県〉



(鴨川一也撮影)

しみず・さぶろう 清水三郎医院院長。昭和14年、千葉県一宮町生まれ。84歳。日本医科大学卒業後、千葉大学附属病院で産婦人科医として勤務。千葉県立東金病院、千葉県がんセンターを経て、56年に同県茂原市に清水三郎医院を開業。夜間救急の適正受診を促すため講習会を開催するなど、地域の救急医療体制の維持に尽力する。

関東三大七夕祭りの「茂原七夕まつり」で知られる千葉県茂原市の豊かな自然に囲まれた医院で、患者と向き合う。

「大丈夫ですか。息切れしていませんか」

胸に聴診器を当て、柔らかな笑顔で語りかける。相対する人の表情に目をこらし、患者と心を通わせる。「『友達みたいな付き合いをしようよ』と患者さんには言う。言いたいことや聞きたいことが伝えられない患者さんもあるから。『まだあるでしょ気になること』って聞くと、ぼろぼろと話してくれるよ」

部活で学んだ「人との関わり」

生まれはコロナ禍の東京で行われた夏季五輪で、サーフィンの会場にもなった同県一宮町。高校時代、14歳年上の兄から「医者とは人のためになって仕事に励めるぞ」とすすめられ、医の道に進むことを決意した。

進学した日本医科大学では、相撲と野球に打ち込んだ。部活での経験は、現在にも生きているという。「医者というのは学校に入れば、そこから外に出ないで、医学生同士や大学の先生という一つの殻のなかで社会をつくっているような感じがする。部活に入りいろいろな人と関わって、心を通じて話ができるようになった」

昭和56年に茂原市内に清水三郎医院を開業。



医学部時代は相撲と野球に打ち込んだ

産婦人科医として寝る間を惜しんで出産と向き合ってきた。「お母さんになる人は強い。痛みで顔をゆがめた母親が、赤ちゃんの泣き声を聞いたときに浮かべる喜びの顔は忘れられない。2人で来た人が3人で帰る。それは楽しいし、喜ばしいし、うれしいことだよ」。新しい命の誕生を目の当たりにできる産婦人科医としての喜びは、格別だったという。

「救急なくして医療なし」

忙しい日々を送りながらも、急な怪我や病気に対応する救急医療にも向き合ってきた。15年ほど前、深刻な医師不足や高齢化から、茂原市周辺地

域では休日や夜間の救急医療体制が逼迫していた。休日・夜間に地域内の病院が当番制で重症の救急患者を受け入れる二次救急では、当番がない「空白日」が生じることもあった。多い時には月に14日間が空白日だったという。

救急医療の立て直しには、行政の協力も不可欠。人件費が病院の持ち出しになることで、二次救急から撤退する病院も増えるからだ。「赤字覚悟でやるのもいいけど、住民が納めた税金

を救急医療に振り向けてもらえるならありがたいし、持続可能な活動になる」。当時の市長に直談判し、「前向きにやりましょう」と支援を取り付けた。

地元医師会では、救急医療体制の立て直しに向けた検討委員会が立ち上がり、先頭に立って尽力。「『自分はお産しかやってないのになぜ私が』と思ったが、なり手がいなかったんです」と苦笑いしながらも「自分の考えの根底に『救急な



地域の救急医療体制の立て直しに努めてきた



スタッフとともに

くして医療なし』という思いがある。とにかく救急をしっかりとやろうよと呼び掛けたかった」と振り返る。

夜間もひっきりになしに医院になだれこんでくる救急車。「赤ちゃんにミルクをあげたが、げっぷが出ない」「子供の熱がなかなか下がらない」など、利用者の多くは軽症の子供で、利用する側の理解不足も悩みの種だった。「子供の救急は軽症が60%ぐらい、中等症が30%台、本当に重症なのは1%に満たなかった」

地元の海岸で落雷事故があった際には、地域内の救急車が出払い、搬送できない状況に陥った苦い経験も。「このままでは助かる命も助からない、本当に必要な人が助かる体制にしたい」と救急への思いを強くしていった。

出前講座で適正利用促す

平成21年には、地域の子供を持つ親らを対象にした出前講座を始めた。初めての子育てでは、子供のささいな変化に過敏に反応し、救急車を呼んでしまうケースが少なくない。出前講座では、子供によく起きる症状とその対処法をレクチャー。救急医療の深刻な現状もデータを示しながら伝えた。「もう救急医療はダメになる。継続していくためには、私たちの努力だけではなく、皆さんの理解や協力も必要になります」。できる限り日中での受診を呼び掛けるとともに、適正な救急車の利用を促した。22年には、別の医師と2人体制で茂原市内の14の小学校に出向き、計720人の保護者に説明した。

こうした活動が実を結び、21年度に4106人だった夜間急病診療所の受診者数は、令和元年度には1815人と半減。4年度には721人にまで減少し、危機に瀕していた救急医療体制を立て直した。

産婦人科医時代は緊急事態に即応できるよう週の半分は医院で寝泊まり。ほぼ休みなく働き続け、家族での遠出はほとんど経験がない。

自宅に帰ったときは「疲れた」と言うことはなく、家族とも密にコミュニケーションをとってきた。一人娘の中村一子さんは父親について、「とにかくいつも元気。どんなに忙しい毎日でも愚痴をこぼすことは一度もなかった」と話す。自身が海外留学を希望しつつも治安面でためらっていたときは、「やりたいと思ったのなら、やってみればいい」と背中を押してくれたという。

活動の原動力は相撲だ。84歳の今でも毎朝20回四股を踏むことを欠かさない。「相撲で培った『負けてたまるか』という気合が今でも生きている。日本医科大学の相撲部の心得は心技体ではなく心『気』体だった。80歳を超えても忘れず心掛けています」。

分娩の取り扱いが59歳で終了し、現在は内科と小児科を中心に週5日の診療を続けながら、地元の小学校に足を運び、救急に関する知識の普及に取り組む。講師の仕事は全てボランティアだ。「一人でも救急医療への理解が広まればうれしいから」。令和4年度は茂原市や一宮町など7市町村の幼稚園、小学校など32カ所に出向き、1千人近くが受講した。「元気な限りはずっと続けたいね」

(松崎翼)



心「気」体の心得は忘れずに心掛けている

「同行医療」42年間、住民と支え合う

関市国民健康保険洞戸診療所 医師

安福 嘉則

〈 岐阜県 〉



(宮崎慎之輔撮影)

やすふく・よしのり 関市国民健康保険洞戸診療所医師。昭和22年、岐阜県大垣市生まれ。76歳。岐阜大学医学部卒業。同県立多治見病院、岐阜大学医学部附属病院を経て、57年～令和4年の41年間、洞戸診療所の所長を務める。学校医として不登校の相談や地域の食生活改善にも取り組み、現在も支援医師として診療を続ける。

岐阜県関市の洞戸地区(旧洞戸村)は人口約1700人の中山間地。清流・板取川が南北を貫き、冬は厳しい冷え込みと積雪に見舞われる。35歳のとき、この地域の診療所に夫人と2人の娘と赴任した。その直後、現在は外科医として活躍する長男を授かった。

この春、在任42年を迎える。そのうち、76歳になるまでの41年間は所長として、外来、訪問診療、学校医など住民の健康を一手に担った。「無我夢中だった。気づいたら、この年になってしまった」と笑う。着任直後、「自転車じゃ訪問診療も買物も難しい」と夫婦で自動車教習所に通った。

「家内はだいぶ苦勞したと思う。でも、文句を聞いたことはない。一生懸命助けてくれた。ありがたいと思う」としみじみ語る。

住民に慕われる「大丈夫!」の先生

住民から「『大丈夫!』の先生」と慕われている。穏やかで威張らず、飾らない人柄。口癖の「大丈夫!」を聞きたくて、通院する患者も多いという。

「患者さんとの間で大切なのが信頼関係。話をしっかり聞いてあげるだけでも、患者さんは気持



医学部時代から医療過疎地で働きたい思いがあった

ちが楽になる。誰かひとりでもわかってくれる人がいれば、大きな力とやすらぎになる」

岐阜県大垣市で生まれ育った。医師を志したのは、剣道に没頭していた高校3年生のとき。合指症の子供を巧みに手術する医師を紹介したテレビ番組を見て、岐阜大学医学部に進んだ。早い時期から「漠然と医療過疎地で働きたい気持ちがあった」という。

卒業後は研修医として県立多治見病院に勤務し、故・山下弘副院長（のちに病院長）から薫陶を受けた。

「手術がうまく、威厳のある整形外科の先生だった」と懐かしそうに語る。外科医になりたかったが、「田舎で診療したい」と話すと、「腰や足が痛い人ばかりだぞ。整形外科をやらんでどうするんじゃ」。

そこで志望が決まった。研修後は岐阜大学医学部附属病院へ。膝を専門に外来や手術など臨床経験を重ねた。「診断が難しい分野で、やってみようと思った」。実際、診療所の患者は足腰の痛い人、糖尿病などの慢性疾患の人が目立つという。「内科的な慢性疾患を持つ人は、どこか足腰の疾患があることが多いですね」。



厳冬期は雪の中、夜間の訪問診療もある

心にしみた「間違ってもいいじゃないか」

「行ってみないか」と声をかけられ洞戸診療所に赴任した。県内に9カ所あった無医の診療所のひとつだった。一番のプレッシャーは、歯科を除く診療科の、さまざまな症状の患者を一人で診ることだった。赴任前には自主的に、名古屋市内の総合病院で内科や外科、小児科の研修もしたという。

着任後、村の人からふと、声を掛けられた。「先生、少しくらい、間違ってもいいんじゃないか」。今でも涙が出そうになる思い出だ。緊張しまくっていた自分を、温かく見守ってくれている人がいた。ゆったりした気持ちで仕事ができるようになった。こうした体験が「診療の要は、人と人とのつながりを確認すること」という信念の根底にあるようだ。

訪問診療や時間外の往診の負担も並大抵ではなかった。昔は深夜でも休日でも電話が鳴った。診療後の夕方に加え、朝も出掛けた。多い月で20軒以上。ときには25キロ以上先の患者宅を往復し、「一晩にぜんそくの子供さんを2人診たこともあった」。

厳寒期は雪に苦しめられた。「北部の板取地区（旧板取村）は、雪の深さが格段に違う」。真夜中の往診後、タイヤが雪に埋まって、近隣の

人たちの手助けを受けた。歩いて側溝にはまって脱臼し、肩を固定して診療を続けた。同級生から贈られたヘッドライトが欠かせなくなった。雪道でスリップし、数メートルを転落したこともあったという。

「最期は自宅で」という望みを尊重し、看取りも続けた。傍で見守り続けることもあれば、判断次第では「様子を見ていてください」と一旦帰宅することもあった。翌朝に再訪すると、布団の上に小刀があった。「何軒も往診した後でヘトヘトだった。『朝まで待ってもらえるか』と思ったが、失敗だった。申し訳ないことをした」と述懐する。

赴任時に決意した「何かあれば、できる、できないではなく、可能な限り、いつでも出かける」を忠実に守ってきた。「今は働き方改革で難しいかもしれないが、間違えていなかったと思う」という。



診療所のスタッフと

これから「真心を尽くしたい」

交流にも力を入れた。膝の悪い女性が「私、先生に治療してもらっているときよりも、歌っているときのほうが痛みはないの」と言うので、「それならお手伝いをしましょう」と、「カラオケまつり」を開催し、長く続けた。「人前で歌うと気が張るし、精神状況によい影響がある。一生懸命に肺を使って息を出すのもいい」。体に負担がかからず、痛くないと知り、「操体法」を診療に取り入れた。理学療法士がいないので、リハビリを施せない患者を考えてのことだった。

近年は人口が赴任時の約6割に減り、時間外の呼び出しも少なくなった。だが、一番の理由は「平成19年にばくが胃の腫瘍で手術したことでは」と思っている。術後の療養中、90歳近い女性が

「先生、わしらが使いすぎたんや。だから手術したんや」と言ってくれた。

令和5年春、後任の所長とバトンタッチ。今も支援医師として診療を続けている。「地域の皆さんの温かさ、優秀なスタッフに助けてもらった。本当に運がよかった。熱意だけではできなかった」と感謝を強調する。「一番の目標は『真心を尽くす』。自分の欲と反対の方向だから」という。若い医師にも「寝食を忘れるくらいの気持ちで勉強してほしい」とアドバイスする。

「病み、いずれ亡くなるのは自分も患者さんも一緒。助け合い、慰め合っていこうじゃないか、という『同行医療』の気持ちでやっていきたい」。しっかりと溶け込んだ地域で初志を貫徹する。

(中川真)



「地域の皆さんに助けてもらった」と感謝を強調する

都市型の地域包括ケア構築に尽力

かわな病院在宅ケアセンター センター長

亀井 克典

〈愛知県〉



(宮崎慎之輔撮影)

かめい かつのり かわな病院在宅ケアセンターセンター長。昭和32年、愛知県名古屋市生まれ。66歳。秋田大学医学部卒業。新潟県国保町立大和病院内科、長野県組合立諏訪中央病院内科、和歌山県白浜はまゆう病院病院長などを経て、平成16年、かわな病院に副院長として着任。法人理事長兼院長を経て会長。

住み慣れた地域で最期まで自分らしく暮らせるよう、医療、介護、看取りまでトータルで住民を支える「地域包括ケア」。地方での取り組みを参考に、豊富な経験と卓越した行動力で、人口も医療環境も全く異なる大都市・名古屋でその構築に尽力した。

「全体を診る医師になりたい」

名古屋市千種区出身。父親は地元の特定郵便局長で、住まいは局の2階。

文章を書くのが好きだったこともあり、高校3年の時には東京の有名私大の文学部に、推薦がほぼ決まっていた。だがそのころ、三河湾に浮かぶ「名古屋から一番近い島」として知られる、日間賀島（ひまかじま）や篠島（しのじま）が無医地区になったことが報道され、「住民が困っているところで医師として貢献したい」と志望を変えた。

「得意の国語の配点が高かった」という理由で秋田大医学部を受け合格。内科を選んだが、当時の秋田大はストレート入局で、第一内科が消化器と神経内科、第二内科が循環器と呼吸器、と臓器別に分けられていた。そのことに疑問を感じ、「特定の臓器や病気だけを診るのではなく、人やその生活背景まで全体を診る医師になりたい」と考えるようになった。



「病気だけでなく人を診る医師に」

卒業に際しては、医局の世話にならず自分で探し、昭和57年、地域医療の旗手といわれていた、新潟の町立大和病院（現・南魚沼市立ゆきぐに大和病院）に入った。同病院には当時、地域医療で有名な黒岩卓夫院長がおり、医療・保健・福祉を一体化した地域医療の施設を開設するなど、先進的な「大和方式」として全国に発信していた。

当時は、病院で患者を待つのが普通の時代。その中で、「在宅医療で患者さんの生活領域に入っ

て診察し、最期まで看取りをするというのが新鮮で、「こういう医療がやりたかった」と思った」と振り返る。中でも衝撃を受けたのが、院内での内科カンファレンス。診断や治療に関する議論をずっと思っていたら、「この家はおばあさんとお嫁さんの仲が悪い」と話が脱線する。だが、いま考えると、「これこそ、人や地域全体を診るということだった」と理解している。

緩和ケアがライフワークに

その後約10年の間に、千葉、長野、新潟、長野と、規模や特徴が異なる地域医療に熱心な公立病院を渡り歩き、経験を積む。千葉の国保旭中央病院時代には、隣町の病院の外科医で「在宅ホスピスの先駆者」として知られる山崎章郎医師が主宰する勉強会に参加し、緩和ケアに目覚める。2度目

の長野赴任となる諏訪中央病院時代には、当時の鎌田実院長に頼み込み1カ月の休みをもらい、英国にある世界初のホスピスに視察・研修に出かけるなど、がん緩和ケアはライフワークとなった。

平成6年には長野から和歌山へ。地元の要望を受け、半官半民の病院（白浜はまゆう病院）の立ち上げを任されることに。諏訪中央病院に依頼が来たのがきっかけで、初代病院長として「10年間、救急から入院、在宅、健診まですべてやった」。開院当初は3日に1度、1人当直で救急に対応したが、白浜温泉は全国有数の観光地。当時、人口2万人の町に1日平均1万人の観光客が滞在し、「酔っばらって温泉に飛び込んでおぼれた」など、救急車が一晚に7、8台も来て、「今考えると、よく体もったと思う」。だが、ここで学んだ病院経営や行政との付き合い方は、現在、さまざまな取り組みを行う上で大きく役に立っているという。

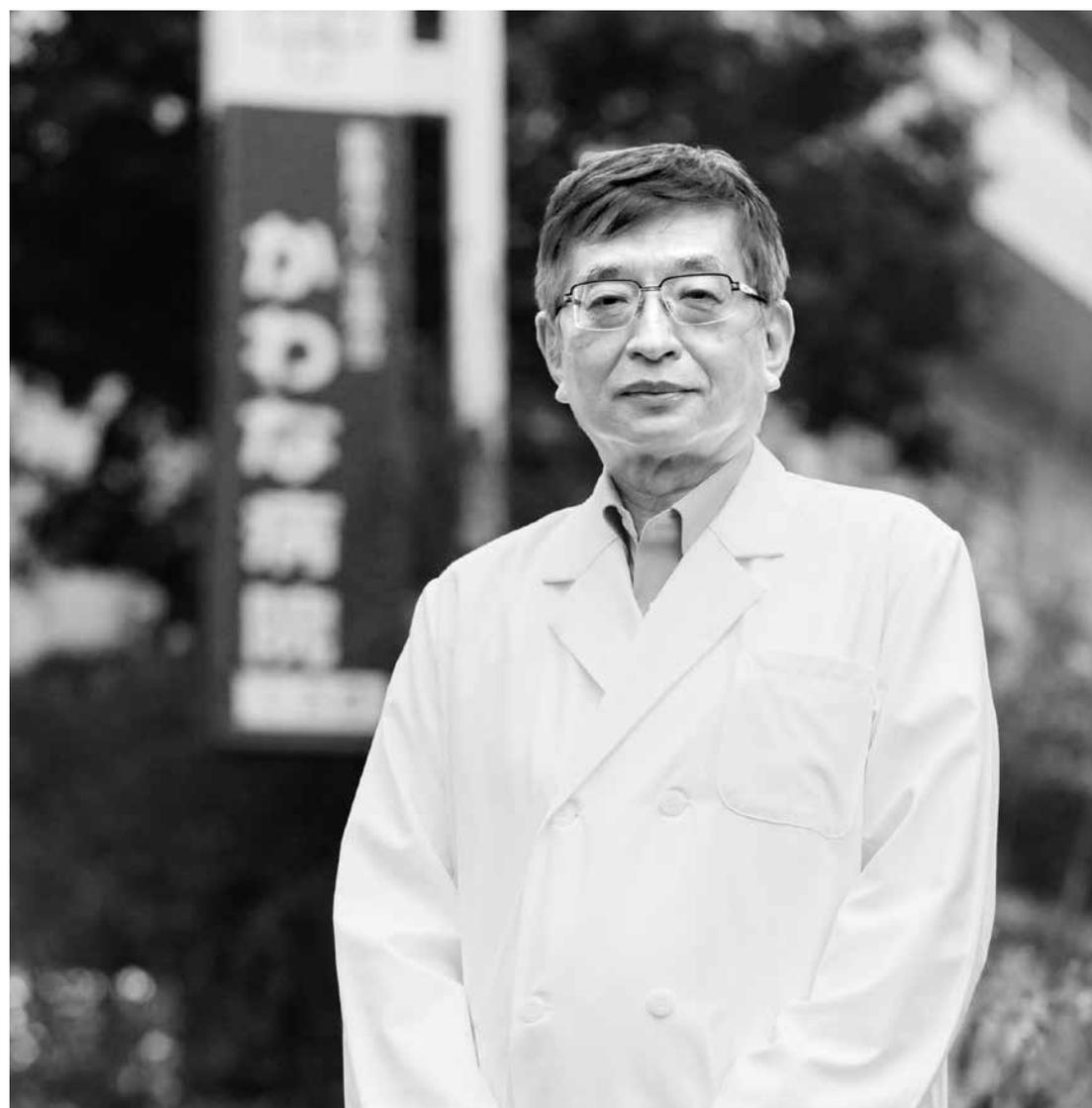


カンファレンスで情報を共有

平成16年、郷里の名古屋へ。「両親が体調を崩し、最期は地元で世話をしたかった」といい、医療法人生寿会からの誘いもあり、かわな病院の副院長に就任。そこから、「都市型の地域包括ケアの実現」という現在に続く歩みが始まる。

地域包括ケアに関し、地方では地域唯一の公的病院と地元自治体が一体となって進めるため取り組みがしやすいが、大都市では多数の医療機関と自治体がそれぞれ独立して存在する。亀

井医師は豊富な経験から、名古屋のような地域では「独立を保ちながらのネットワークづくりが何より重要」といち早く本質を見抜き、「顔の見える関係をつくることをとにかく大事にした」と強調する。生寿会の看護部長の三浦真弓さんも「亀井先生は、ふだんからチームで物事を進めようという姿勢で、若手やベテランの区別なく、スタッフ全員の意見をよく聞いてくれる」と、他者との関係を大事にする人柄をたたえる。



「顔の見える関係づくりを大事にしてきた」



在宅ケアセンターのスタッフと

多職種の連携で患者を支える

名古屋のような都市部でも、患者自身が生活する場で療養できるよう、定期的な訪問診療と緊急時の往診など多職種によるサポート体制づくりに奔走。名古屋市や同市医師会とともに、歯科を含む医療機関、薬局、訪問看護ステーション、介護事業所などを端末で結び、診療・調剤・介護情報を共有する医療・介護連携ネットワークシステムの構築に尽力した。

また、かわな病院の敷地内に、老人保健施設やサービス付き高齢者向け住宅を併設するとともに、訪問診療部、訪問看護ステーション、ヘルパーステーションなどからなる「在宅ケアセンター」を設立。現在、800人以上に訪問診療を行い、年間250人を超える看取りを行うなど、地域包括ケアの一翼

を担う。

ライフワークであるがん緩和ケアに関しては、認定医や認定看護師を含む多職種の「緩和ケアサポートチーム」により、緩和ケア外来、訪問診療、施設ケア、在宅ケアなどを連携して行う「在宅ホスピスかわな」を組織。常時約40人のがん緩和ケアを行うほか、がん患者やその家族が悩みや疑問、不安を気軽に専門職に相談できるよう、NPO法人「tomoniなごや」を設立し、オンラインや電話で無料相談に応じる。「医療法人の理事長という責任ある立場から解放されたので、社会貢献として続けたい」と話す。

今回の受賞については「40年以上、こつこつと患者さんや住民に寄り添ってきたことが評価され、うれしく思う」と語った。

(山本雅人)

生き方に寄り添う「明日香のイチロー」

明日香村国民健康保険診療所 管理者

武田 以知郎

〈奈良県〉



(甘利慈撮影)

たけだ・いちろう 明日香村国民健康保険診療所管理者。昭和34年、奈良県御所市生まれ。64歳。60年に自治医科大学卒業。奈良県天川村国民健康保険南日裏診療所所長、国立福井病院小児科医長、奈良県立五條病院へき地医療支援部長兼小児科部長などを歴任。平成22年から現職。令和3年度日本小児科学会小児保健賞受賞。

奈良県明日香村と聞いてまず思い浮かぶのは、飛鳥美人壁画が発見された高松塚古墳や石舞台古墳。「日本人の心の原風景」と呼ばれ、古代遺跡の宝庫として知られる。観光地としてにぎわうイメージが強いが、人口約5千人のうち高齢者が4割を占める過疎の村という現実も横たわる。

住民の健康、人生最期の迎え方…。患者宅に足を運んで暮らしぶりを感じながら、明日香で生きる人々に寄り添う。「逝き方」だけでなく「生き方」を患者とともに考え続ける。

「赤ひげ大賞はあこがれだったんです」。思わず顔をほころばせた。「医療の面で立派な功績が

あるわけではないけれど、村の人たちから信頼され認めてもらったという思いです」

平成22年に明日香村国民健康保険診療所に赴任した。村民のニーズを把握することからと訪問診療などを考えたが、診療所自体あまり知られていなかったという。理由は、村の立地が大きかった。隣接する県第二の都市・橿原市には県立医科大学附属病院など大規模な病院があり、橿原市まで通う患者が多かった。「医師が自宅に来るといふ訪問診療の文化がなかったんです」

身近な診療所にと、「イチロー先生」と自ら名乗って村民との距離を縮めていった。



村の医療現場について研修医にアドバイス

親しみ込め「子供ちゃん」

村との縁はすでに、50年あまり前にあった。明日香の地にふさわしく、きっかけは古代遺跡。昭和47年、飛鳥美人壁画の発見で日本中に考古学ブームを巻き起こした高松塚古墳の発掘現場へ、歴史好きの父に連れられて訪れた。「ミカン畑を縫うように歩いて古墳まで来たのを覚えています」

出身は、村から数キロ西方の同県御所市。町のお医者さんの記憶といえば、幼少期に熱が出たらすぐ往診してくれたこと。「お尻にぶちゅっと注射してくれたら治る。そんな思い出でした」

高校時代に医師を目指し、自治医科大学に合格。都会でばりばりと最先端医療に携わるより、

地域の人たちと近い距離で接したかった。へき地医療に取り組む同大学は「自分に合っている」と感じた。

大学以来の思いが揺らぐことはなかった。もともと小児科専攻とあって、明日香村の診療所では子供が親しみやすい雰囲気づくりを心掛ける。診察室にはアニメキャラクター、犬やブタなどのフィギュア、ミニカーが並ぶ。「子供ちゃんはおもちゃに夢中になって、好きなように並べ替えたり自分の世界を作るんです」。その間に、子供の症状や普段の様子を親に聞く。

赤ひげ大賞受賞の取材中、「子供ちゃん」という言葉が何度も聞かれた。大人、医師としてより、同じ目線でという姿勢がにじみ出していた。「診察室は注射を打たれて大声で泣くところではない。遊びに来



映画「明日香に生きる」は多くの人の共感を生んだ

るという感じで来てもらい、笑顔で帰してあげたい」

子供を診ていると、その両親や榎原市内の病院に通っていた祖父母も診療所に来るようになり、家族ぐるみで診療することも増えた。

「逝き方」とともに「生き方」を

明日香を歩いて、コメや野菜作りをしている人が多いことに気づいた。そのため、診察中も、畑

で栽培する旬の野菜や果物の話になることが多い。歴史の宝庫・明日香だけに、村内で発掘が進む遺跡について楽しそうに、そして誇らしげに話す人も。

カルテには、症状だけでなく日常の暮らしぶりや趣味なども書き込むようにしている。「人生の歩みを語ってもらうとその人らしさが出てくる。生活、生き方に寄り添うと、いいケアができるのかな」

地域に根差した取り組みが、在宅医療に携わる医師と患者の交流を描いたドキュメンタリー映画「明日香に生きる」(溝淵雅幸監督)として令和5年に公開された。作品を見た看護師らから「看護の原点を見せてもらった」「こういう風に患者に接していたらよかったですね」と感想が寄せられた。

映画だけでなく、医療をテーマにしたコミック作品にも関わるようになった。北海道の在宅診療所の医師が、最期を迎える患者と向き合う姿を描いた「はッピーえんど」。作者の魚戸おさむさんとも親交が深く、ストーリーについてしばしば相談を受ける。第7巻では武田さんのメッセージが添えられた。「自分や大切な人のため、逝き方だけでなく生き方を問う物語です」。明日香での診療そのままの思いを込めた。



「人々の生活に寄り添うことがいいケアに」と語る

「88歳。まだ20年ありますね」

高齢の患者との会話では、どうしても年齢の話になるという。

「先生、もう88歳になりましたん」

「えっ、まだ88歳ですか」

そんな会話が交わされる。「88歳といえば、あと2年しかないと思う人もいるが、人生百年時代。まだ20年ぐらいあると伝えていきます」

そして会話をつなぐ。「20年後にはリニアモーターカーは走っているかなあ。どこか行きたいところがありますか」と。自身の年齢や体調に目が向きがちだった患者も、「そうか、いろいろできそうだな」と前向きになっていく。

研修医や医学生の受け入れにも力を尽くす。診察室の丸い椅子にちょこんと座っている患者や検

査データだけでなく、畑を耕したり地域で生きる姿を見てほしいとの思いがある。

昨年12月に研修医として勤務した角南有香さんは訪問診療にも同行した。「武田先生はいつも患者の目を見てきちんと名前を告げてあいさつされる。当たり前のことを大事にしながら、やわらかく語りかける。私も患者だったらいろんなことを話したくなるだろうなと思います」

自宅での看取りが理想ともいわれるが、現実的に難しいこともある。ただ、自宅か施設かを迫るのではなく、自分で選ぶことができる体制を整えることに心を砕く。「在宅でとなればチームを組んで支える。人生最終章の選択ができる。これが明日香のよさだと思います」

(小畑三秋)



魚戸おさむさんが描いた武田先生の似顔絵が患者を出迎える

小児科に保育園や親子支援館を併設、働くお母さんを支える

きたの小児科医院 院長

北野 明子

〈福岡県〉



(渡井君夫撮影)

きたの・あきこ きたの小児科医院院長。昭和27年、神奈川県藤沢市生まれ。72歳。51年に九州大学医学部卒業。福岡市立子ども病院感染症センター勤務を経て、南アフリカ共和国に留学の後、61年、きたの小児科医院開業。病児保育室や親子支援館、病児保育併設型小規模保育施設を開設するなど、子育て環境の改善に取り組んでいる。

福岡県の中南部、筑後地方に位置する朝倉市に「きたの小児科医院」はある。その敷地内には病児保育もできる「ピッコロ保育園」、働く母親を支援する「すこやか親子支援館 ピッコロ」が併設されている。3人の子供を育てながら、40年近くこの地で小児科医を続けて積み重ねてきたが、「まだ理想通りではない」と語る。

3人の子を連れて南アフリカへ

福島県喜多方市から親の転勤のため高校2年で大分市に転居。ここで出会った友人の影響もあって医学の道を目指すことになった。「優秀な人が多くて刺激を受けたんです。同じクラスから4人も九大医学部に進みました」という。大学で出会った正剛さん（現・大分大学学長）と卒業後に結婚。昭和58年に夫の留学先だった南アフリカ・ケープタウンに同行した。このとき3人の子供は5歳、3歳、3カ月というからその行動力に驚かされる。

「感染症やワクチン、アレルギーなど英国医療の影響を受けた海外の状況を経験できました。人種差別や貧富の差もあり、虐げられた子供は入院しても声もあげない、心



開業医の仕事と3人の子育てを両立させた

がやられていると訴えることもできない現実を見ました」。アパートヘイトが残る時代、白人と黒人で病院が違うなど劣悪な環境で育てられる子供の姿も目にした。一方で日本人は名誉白人とされ、病気の子供を預かってもらえたり、外国人でも無料ワクチンが接種できたり、当時の日本よりも進んだ子育て環境も経験できたという。

帰国後、福岡市立こども病院を経て昭和61年、建設機械を扱っていた福岡県甘木市（現朝倉市）の夫の実家の敷地内に医院を開院。「子供を育て

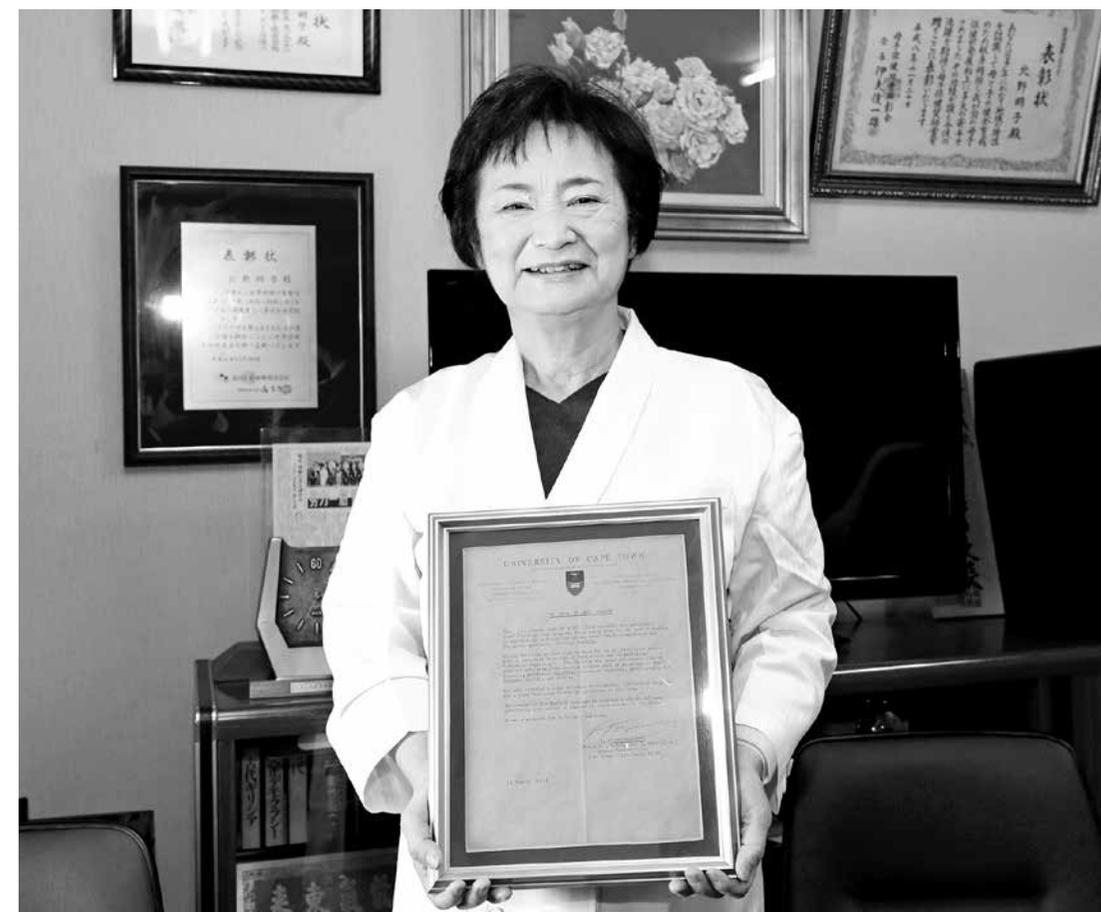
ながらキャリアアップは難しい。開業したほうが子育てにはいい」と考えたという。34歳、下の子はまだ2歳だった。医師会の救急夜間輪番などもあり、「普通の家族のようにはいかなかった」と苦笑する。さらりと振り返るが、開業医と3人の子育ての両立の苦労は想像に難くない。だが、そうした経験が役立っていく。

働く女性に応える病児保育室

平成12年に地域初の病児保育室を開設した。「県から打診があったとき、すぐに手をあげました。イクメンとかなかった昔は男女の役割分担というか、(子育ては)自分の手に全部かかってくる。

仕事中に子供が熱を出してどうしようとか、どこに預けようとなる。働く女性は本当に大変なんですよ」。自身の子育て時代はそうした施設はなく、熱があっても子供一人で留守番ということもあった。男女雇用機会均等法で働く女性が増え、その必要性は高まっていた。

同じころ、日本小児科医会認定「子どもの心相談医」を取得した。「発達障害など心の問題で不安になるお母さん、子育て経験がなく自信を失っているお母さんが増えた」。かつては兄弟も多く子育てを見たり、自分も参加したりしていたが、いまはそれがない。子供を授かって初めて大変さを知る人が増え、インターネットを見ても情報が多く何が正解かわからない。身近に相談できる人がいな



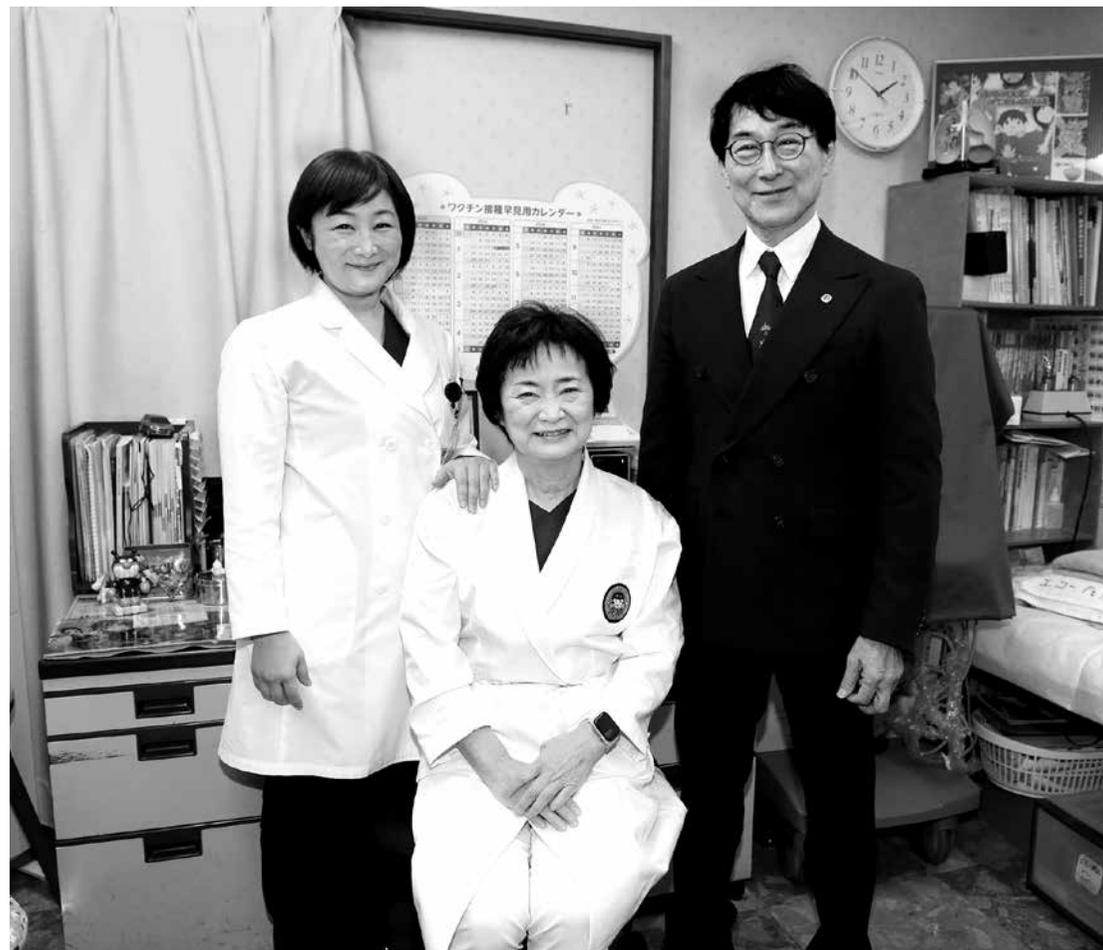
南アフリカ共和国に留学し、日本の医療との違いも感じた

い、相談したくないケースもある。開業当初は感染症などへの対応が中心だったが、徐々にこうした必要性が高まっていたという。

18年に禁煙外来、栄養相談を始めたのも「子供の環境をよくするには親を啓発していかないと」という考えからだ。せきが止まらないという子供を連れて親の胸ポケットにタバコの箱がある。「そこに毒ガスがあるからじゃないの」。子供のためならタバコをやめられる、それは親の健康にもプラスになる。そう考えて指導を続けた。親の食生活は子供の健康に直結する。高カロリーなジャンクフードを食べ、運動しない生活は肥満や生活習慣病につながる。子供の環境を良くするために講演会などでも

訴えてきた。

22年には親子が交流し、学び、遊ぶ場所として「すこやか親子支援館 ピッコロ」を医院の隣に建てた。「授乳や離乳食の方法、アレルギーへの対応など子供にあわせて具体的に相談できる場所があったらいいよね」ということで栄養士さん。発達障害の子供はどうしてそうになってしまうか分からないけど叱られて困っている。親もそれを止めなさいと言って悩んでいる。そうした親子に対してはカウンセラーに寄り添ってもらおう。専門機関は混んでいて何カ月も待たなくてはならないが、それまでの間、親と子供をサポートしていく。



夫と小児科医の長女とともに

「できることから」続けてきた

ピッコロは、ベビーマッサージ、絵本の読み聞かせ、ダンス、ピアノ、健康教室、食育などさまざまなイベントがあり、親と子が遊んだり、学んだりできる場所となっている。こうした施設を自治体で作ることは珍しくないが、民間医院の敷地内に自ら作ってしまったことに驚かされる。「そこに行けば子供のことを何でもできる、そういう施設を作ったかったですよ」。

令和3年には病児保育併設型の「ピッコロ保育園」も敷地内に開園した。園長は0歳で南アフリカに行った長男。長女も小児科医として医院で一緒に働いており、「普通の家族」のような子育てができなかったと述懐するが、どうして子供たちは母の

背中をしっかりと見ていたようだ。

後進、という意味では同医院の患者の中から女性医師が4人誕生しているという。人口5万人弱の地方自治体の一地域としては特筆すべきものだろう。「私を見て、この世界楽勝と思ったのかも」と笑うが、身近なロールモデルだったことは間違いのない。地域の人もまた、その姿をしっかりと見ていたようだ。

自身の経験や社会の変化、地域の要請に対応する形で必要なことを実施してきた。「どうにかならないかなあ…」と思いながら、できることから」続けてきた結果が現在の姿だ。世の中の変化とともに子育ても変わってくる。子供とその親に何が必要か。常に考え、そしていまも寄り添い続けている。

(中野謙二)

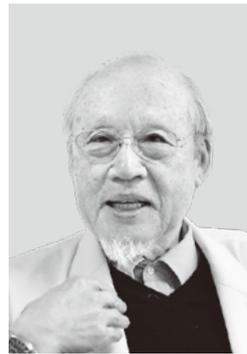


きたの小児科医院には病児保育併設型「ピッコロ保育園」もある

赤ひげ功労賞

受賞者

(順列は北から)



茨城県

横倉 稔明 (81)

やすらぎの丘温泉病院
総院長

日本医療企画 地域介護経営 撮影



山梨県

原 まどか (65)

横田内科小児科医院
副院長



神奈川県

水上 潤哉 (45)

みずじゅんクリニック
院長



静岡県

疋田 順之 (89)

介護老人保健施設
まんさくの里
施設長



福井県

河合 邦夫 (66)

河野診療所
所長



三重県

前沢 義秀 (75)

東海眼科
理事長



京都府

片山 久史 (70)

片山産婦人科
理事長・管理者



広島県

梶原 四郎 (76)

五日市記念病院
前理事長



和歌山県

松尾 晃次 (66)

西富田クリニック
所長



徳島県

洲崎 日出一 (87)

TAOKA こころの医療センター
精神科専門医



鳥取県

森本 益雄 (82)

森本外科・脳神経外科医院
院長



鹿児島県

西 征二 (79)

西内科・循環器科
院長



岡山県

松下 明 (57)

奈義・津山・湯郷ファミリー
クリニック
所長



沖縄県

松嶋 顕介 (67)

まつしまクリニック
院長

(年齢は2024年3月1日現在)

選考経過報告



日本医師会 常任理事

黒瀬 巖

赤ひげ大賞並びに赤ひげ功労賞受賞者の皆様、このたびは誠におめでとうございます。

第12回「日本医師会 赤ひげ大賞」の選考の経過をご説明させていただきます。

第12回「日本医師会 赤ひげ大賞」は、昨年6月1日、日本医師会より都道府県医師会宛てに推薦依頼文書を発出し、ご推薦を頂きました。

選考に当たりましては、先ほどご紹介のありました選考委員の皆さんと共に「候補者推薦書」による事前審査を行い、その結果を基に、11月9日、日本医師会館で選考会を開催いたしました。その中で、「赤ひげ大賞」の受賞者5名並びに「赤ひげ功労賞」の受賞者14名を決定し、本年1月10日、日本医師会の記者会見で今回の結果を公表し、本日の表彰式を迎えるに至りました。

受賞された先生方は、長年にわたり、地域住民の健康確保に親身に取り組んでこられた方々ばかりであり、選考には困難を伴いましたが、受賞者には本賞にふさわしい方々を選考できたと考えております。

コロナ禍や震災により、地域に根差して医療を行うかかりつけ医の存在の重要性が認識されています。

本賞が、各地域の先生方の励みになり、地域医療の更なる充実や後進の育成へとつながることを願っております。

以上、経過のご報告とさせていただきます。

ありがとうございました。

2024年度

第13回「日本医師会 赤ひげ大賞」

● 推薦概要 ●

日本医師会

赤ひげ大賞

- | | |
|-------|--|
| 主催 | 日本医師会、産経新聞社 |
| 後援 | 厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ |
| 協力 | 都道府県医師会 |
| 特別協賛 | 太陽生命保険 |
| 対象者 | 病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会及び都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日本医師会・都道府県医師会役員は除く）。 |
| 推薦方法 | 本賞受賞にふさわしいと思われる方1名を各都道府県医師会会長が推薦 |
| 受賞発表 | 産経新聞紙上 |
| 選考 | 日本医師会と産経新聞社の主催者側委員に第三者を交えた選考委員会において選定 |
| 賞状と副賞 | 賞状、記念盾及び賞金等 |



保険で、 認知症を 予防!?

ひとりひとりの
元気!長生き!に、寄り添う。

人生100歳時代。

元気で長生きするために、今からできること。
そのひとつが、病気を「予防する」ことです。

だから、太陽生命は病気に「備える」だけでなく、
病気に「ならないため」の保険を開発。

給付金を、検査などの予防にも活用できます。

保険に入ること、健康をたもつ。元気になる。

そんな未来をつかっていきたいから。

太陽生命の保険は、予防に向かって進んでいきます。

ひまわり認知症 予防 保険

※当広告では選択緩和型認知症診断保険に生存給付金特則を付加したプランを「ひまわり認知症予防保険」としてご案内しています。

さあ、保険の新次元へ。

T&D 保険グループ

[太陽生命資料請求ダイヤル] 営業時間:月~日 9時~17時

(通話無料) 0120-04-22-33

※左記以外は自動音声にて24時間受付しています。
※祝日・年末年始(12/30~1/4)は休業します。



太陽生命

